

STORY 物語のある会社をめざして

Mutureは「相利共生」を自ら体現するため、人事制度や一人ひとりの働き方を真剣に考え、創立以来、より良いあり方を時間をかけて模索してきました。

だからこそ、Mutureが設定している制度や働き方には必然的に物語があります。

そして物語の主人公は、会社ではなく、多彩な「個」です。

会社の中心は人。新しい価値を生み出すのも人です。「人」自体が大変貴重なアセット(財産)であり、企業活動の源泉であるというのがMutureの考え方。一人ひとりがいかにして仕事に対してやりがいを感じ、事業の目的と重ね合わせながら力を発揮できるかということが大事であり、結果としてそれが事業の拡大に寄与すると考えています。

「どうしたら自らのスキルとやりがいを重ね合わせていけるか」「どうしたら最も自分らしい価値を発揮できる状態をつくっていくか」という点において、「PX」の考え方を重視しています。「社員」ではなく「人」として向き合うことで、会社として何ができるかを考えるのがPXです。

CASE 1 オンボーディング体験

入社体験に関する制度。内定から入社までの間に、Mutureの事業や働き方などについて既存メンバーと情報を共有することで、入社後、安心して働けること、個の価値を早期に発揮できることを願ったものです。

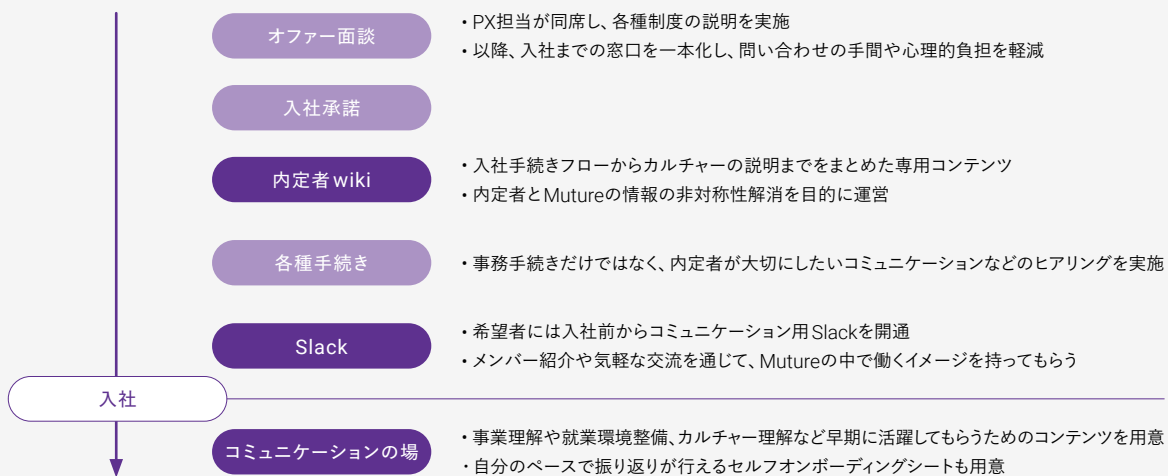
CASE 2 Slackを活用した疑似ピアボーナス*

チームコミュニケーションツールのSlackを活用し、メンバー間で感謝の気持ちを表したり、価値を創造したことを賞賛したりする仕組み。担当領域が異なる環境下でも、個の活躍を可視化し、チームの一体感や自己効力感を向上させることを目的としています。

*「ピア」は「仲間」「同僚」の意味で、ピアボーナスは、社員同士で報酬を贈り合う仕組みのこと

人が財産 〈MutureのPX〉

内定から入社までのオンボーディング体験



右の2つの事例とも、その人にとって最もパフォーマンスを発揮できる条件があることを前提とし、それを尊重することを考えた制度です。従来の企業にも働き方をサポートするさまざまな制度がありますが、多くの場合、主語は「個」ではなく、会社の都合を優先したものが多くはないかと考えたことが起点になっています。



創立メンバーの5人。前列左から、芝尾崇孝、米永さら沙、後列左から、筋大介、田邊亜矢、中村紘也(P15~18で彼らのパーソナリティに迫ります!)

何はなくとも コミュニケーション

Mutureは経営の透明性を非常に重要視しています。それも、単に透明にしていれば伝わるということではなく、日々のコミュニケーションの設計が大切であると考えています。また、その一方で、互いの得意不得意を理解し、うまく補い合えるようなコミュニケーション設計にも心を配っています。

右の3つの事例のほか、左ページでPXとして紹介したオンボーディング体験やSlackによる疑似ピアボーナスもコミュニケーションの一環。言い換えれば、コミュニケーションは、多彩な「個」を互いに尊重し合うPXの重要なファクターです。

CASE 1 「場所の自由」と「時間の自由」

コワーキングスペースがMutureのベースですが、在宅勤務も自由。個人の置かれている状況によって就業できる時間は異なるとの考えから、午前5時から午後10時の間に働けばよく、コアタイムも設定していません。

CASE 2 No Meeting Day

毎週水曜日は、Muture内のミーティングを一つも入れていません。ほかの曜日はクライアントの都合などで時間がコントロールしにくい分、「週1日は自由日」とし、メンバーそれぞれの多彩な働き方を尊重しています。集中して作業を進めたり、息抜きに散歩をしたり、1日好きなペースで働くことができます。

「個」の働き方を 尊重する

CASE 1 nice to μ you

月に1回、コワーキングスペースに全員が集まり、ミーティングを行っています。互いに何をやっているのかをカジュアルに情報交換することで、それぞれの知見を皆のものにしていきます。また、自己紹介や簡単なゲームなどリラックスできるアイスブレイクを交えた、よりカジュアルなウィークリーミーティングも開き、コミュニケーションを深めています。

CASE 2 μ TUNE(ミュージューン)

Mutureのポッドキャスト。企業のあり方、個人の働き方、おすすめ本など、さまざまなテーマをメンバーが語ります。



ポッドキャスト「μ TUNE」

CASE 3 丸井グループとのコミュニケーション

丸井グループの事業会社との間にもチームコミュニケーションツールのSlackやオンラインホワイトボードツールのStrapなどを導入し、オンラインで議論できる体制を整えました。常に開かれた状態でコミュニケーションが取れ、手を動かしながらアイデアを話し合えるので、Mutureのメンバーは、議論そのものの内容が変わったことを実感しています。